木下直之館長超私的企画

浜松を歩く人

先人内田六郎の足跡

ちょっと昔の浜松を振り返ることが、この部屋のテーマです。浜松市美術館は内田六郎コレクションを中核にして、昭和46年（1971）に開館しました。ちょうど50年前のことです。今春開催された「遠州の民藝」展でも光が当たった内田六郎（1892-1974）は浜松の文化に大きな貢献を果たしました。産婦人科医として活躍する傍ら、ガラス絵、泥絵、大津絵、長崎・横浜浮世絵など、民衆的で異国情緒あふれるものに魅せられ、ユニークなコレクションを築きました。お城の絵を描いて、内田賞（児童画コンクール）をもらった私にとっても、忘れられない人なのです。この先人の背中を追いかけて、ちょっと昔の浜松を歩いてみましょう。

1

「谷島屋タイムス」を読む

谷島屋書店は創業が明治5年（1872）ですから、浜松にとどまらず、日本でも有数の老舗書店です。『谷島屋タイムス』は大正7年（1918）の創刊、中断をはさんで昭和13年（1938）11月まで計107号を刊行しています。タブロイド版4頁は、純文芸・読書・教育・スポーツと話題満載です。誠心高等女学校の教員であった中村精は最後の5年間に編集長を務めました。休刊の年、谷島屋書店はモダンな店舗を構えると、今度は階上に催事ホールを設けることで、浜松の文化的な拠点となりました。その紙面から、さらに俳人相生垣瓜人（あいおいがきかじん）がデザインし今なお使われている包装紙から、当時の浜松の文化活動を振り返ってみましょう。

2

美術館と浜松駅の間にあるもの

3

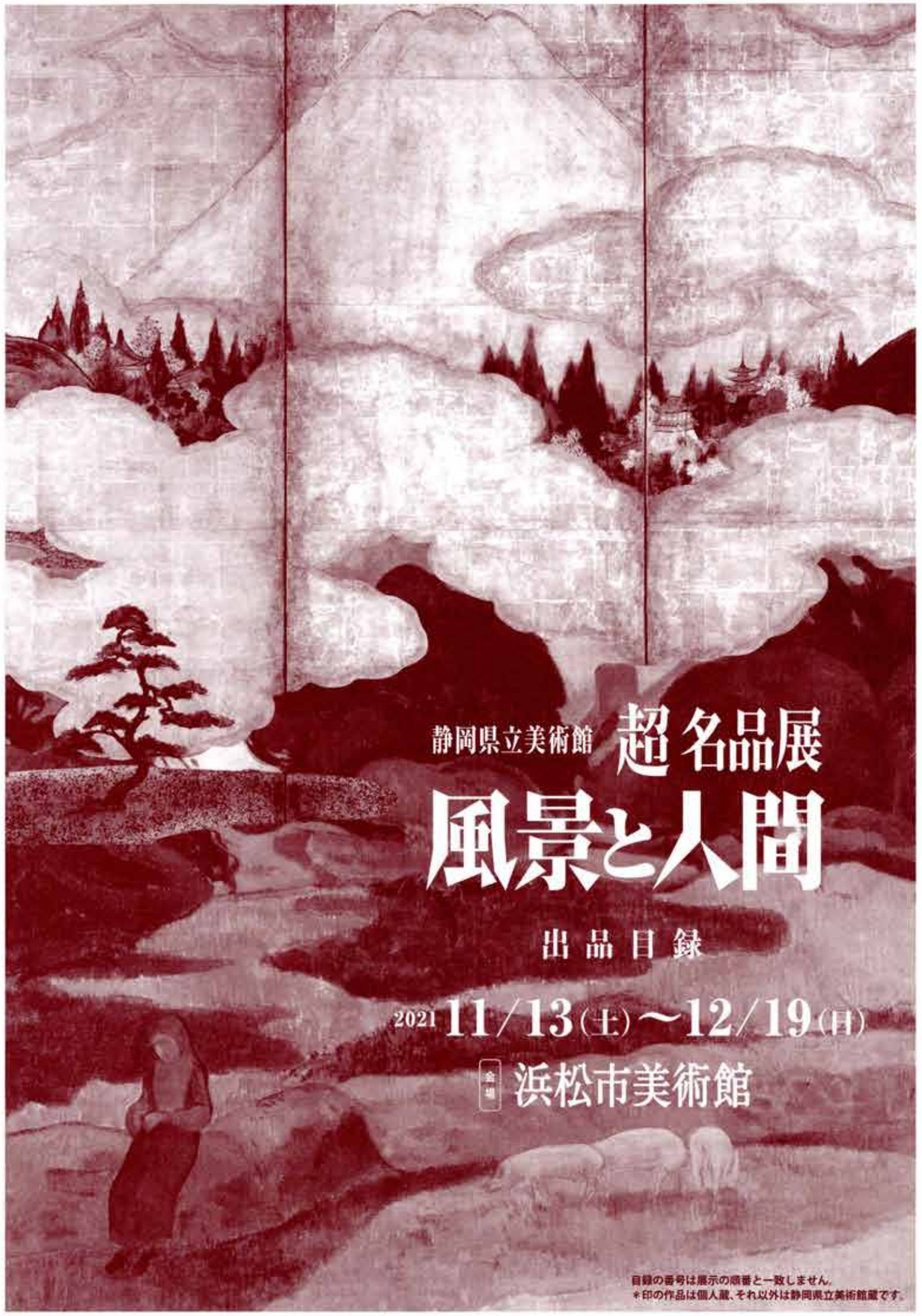
私的な思い出話を許していただけるならば、美術館と浜松駅の間は、中学生だった私の通学路です。美術館に隣接する中部中学校に駅前の家から毎日通いました。それは昭和41年（1966）春からの3年間でしたから、半世紀が過ぎた今、風景はすっかり変わってしまった。とはいえ、歩き回ってみると、彫刻や記念碑や土蔵など、あちらこちらに気になるものが残っています。潮が引いた後の磯のようにです。それらを昭和33年（1958）の地図に落とし込んでみました。新川に沿って歩いてみると、誕生橋、分器橋、田つなぎ橋、万年橋、姥ケ橋など橋の名前からは、もっと昔の浜松がよみがえってきます。

4

わたしの城下町

小柳ルミ子「わたしの城下町」は昭和46年（1971）の大ヒット曲、木下直之『わたしの城下町』はそれから36年後の小ヒット出版（かろうじて文庫にはなった）。浜松城再建のために市内各所に置かれた募金箱を表紙にしました。空襲で焼け野原にされた全国の城下町で、復興のシンボルとして天守閣が次々と再建されました。浜松城には天守閣は建っていませんでした。あったものは鉄城閣という名の展望台でした。昭和25年（1950）の浜松こども博覧会では木造の天守閣が建ったのですが、ベニヤ板に石垣の絵を描いたお粗末なものでした。昭和33年（1958）に、ようやく現在の天守閣が姿を現したのです。鉄、木、鉄筋コンクリート造三代の天守閣を振り返ります。

1 大津絵「荷持奴」 浜松市美術館蔵
2 谷島屋書店包装紙（装幀：相生垣瓜人）
3 佐藤漢「浜松の街」 大分県立美術館蔵（写真展示）
4 浜松城再建募金箱 個人蔵



はじめに

「きれいな風景を見に行こう」という言い方をよく耳にしますね。あたかも「きれいな風景」がどこかにあり、それを見るために人間の方から足を運ぶという発想なのですが、「風景と人間」が別個の存在として向き合っているのではありません。風景の中に人間が包まれている。いや、人間が風景を作り出している。みなさんが見ている風景は、みなさんにしか見えていないのです。

この展覧会場に並んでいる絵は、まずは画家たちが目にして、それから作り出した風景です。「まるで絵のように美しい」という耳慣れた表現は正しい。絵が美しい、楽しい、恐ろしい、あるいは不気味なのです。いうまでもなく美術とは人間が作り出した、極めて人間臭い世界です。たとえ描かれたものがどれほど無垢の自然であっても。さまざまな風景を巡り歩き、ゆっくりと遊んでいただきたいと思います。

静岡県立美術館　館長 木下直之

番号	作者名	生没年	作品名	制作年	材質	寸法(cm)
1	難波田龍起	1905-1997(明治38-平成9)	ミクロの世界	1966(昭和41)	キャンヴァス、油彩、エナメル	162.1×130.3
2	児島善三郎	1893-1962(明治26-昭和37)	箱根	1937(昭和12)頃	キャンヴァス、油彩	90.7×115.2
3	坂田一男	1889-1956(明治22-昭和31)	祭壇の男	1926(大正15)	キャンヴァス、油彩	80.0×60.0

第一章　天

天とはどこにあるのか。それは地上に暮らす人間が仰ぎ見る世界です。人の手が届かぬ、人智を超えた場所、神々の領域です。あるいは死者が逝く国です。空間的にも時間的にも、はるか彼方にあり、茫漠としていて、特定のかたちを持たない。

そこにも画家たちは目を向けて、その姿をとらえようとして来ました。ユベール・ロベールやアシル=エトナ・ミシャロンの絵の中には、人生を超える悠久の時間が流れています。描かれた廃墟は人間の営みの儚さを教えてくれます。モネの絵は、なるほどモネの個人的な印象を描いたものに過ぎないかもしれないが(ゆえに印象派と呼ばれた)、世界がそのような光に満ち溢れていることへの驚きから生まれたものです。

4	ユベール・ロベール	1733-1808	ユピテル神殿、ナポリ近郊ポッツォーリ	1761	板、油彩	39.1×43.8
5	アシル=エトナ・ミシャロン	1796-1822	廃墟となった墓を見つめる羊飼い	1816	キャンヴァス、油彩	81.0×100.0
6	ヨーハン・バルトールト・ヨンキント	1819-1891	オンフルール近郊の街道	1866	キャンヴァス、油彩	58.4×78.4
7	クロード・モネ	1840-1926	ルーアンのセーヌ川	1872	キャンヴァス、油彩	49.2×76.2
8	須田国太郎	1891-1961(明治24-昭和36)	筆石村	1938(昭和13)	キャンヴァス、油彩	97.0×145.5
9	田村一男	1904-1997(明治37-平成9)	北越大雪	1976(昭和51)	キャンヴァス、油彩	145.5×89.4

天と地をつなぐ富士

日本一高い富士山は、それゆえに、天に一番近い場所でした。すでに『万葉集』に、「神の山」(高橋虫麻呂)と歌われています。富士は噴火を繰り返しましたから、神の怒りを鎮めることが信仰に結びつきました。やがて仰ぎ見るだけでは済まず、登拝を目指す修験者が増え、山頂には大日如来が祀られました。霊峰は大日如来が脇侍とともに座す三つの峯で表現され、定型化しました。鎌倉時代に東海道の往来が盛んになると、南から眺める富士、静岡県人には馴染み深い、駿河湾越しの、三保の松原から眺める富士図が盛んに描かれるようになります。現代人にとってもなお理想の富士図が求められ、富士は特別な山であり続けています。

10			富士曼荼羅図	17世紀初(江戸初期)	紙本淡彩	131.0×67.0
11			富士三保松原図屏風	16世紀後半(室町時代)	紙本金地着色	各137.5×329.4
12	谷文晁	1763-1840(宝暦13-天保11)	富士山図屏風	1835(天保6)	紙本墨画群青引	163.1×363.2
13	椿椿山	1801-1854(享和元-嘉永7)	山海奇賞図巻(場面替えあり)	1830(文政13)	紙本淡彩	13.5×466.5
14	狩野永岳	1790-1867(寛政2-慶応3)	富士山登龍図	1852(嘉永5)	絹本墨画	179.0×87.0
15	司馬江漢	1747-1818(延享4-文政元)	駿州薩陀山富士遠望図	1804(文化元)	絹本油彩	78.5×146.5
16	歌川貞秀	1807(文化4)-?	大日本富士山絶頂之図(11/28まで展示)	1857(安政4)	紙、木版、色摺	各37.8×25.7
17	歌川芳幾	1833-1904(天保4-明治37)	富士山北口女人登山之図(11/30から展示)	1860(万延元)	紙、木版、色摺	各36.0×25.1
18	平木政次	1859-1943(安政6-昭和18)	富士	1897(明治30)	キャンヴァス、油彩	44.0×67.0
19	五姓田義松	1855-1915(安政2-大正4)	富士	1905(明治38)	キャンヴァス、油彩	46.8×101.5
20	和田英作	1874-1959(明治7-昭和34)	富士	1918(大正7)	キャンヴァス、油彩	60.6×80.2
21	石川直樹	1977(昭和52)-	Mt. Fuji #38	2008(平成20)	C-print	90.0×112.0
22	石川直樹	1977(昭和52)-	Mt. Fuji #41	2008(平成20)	C-print	90.0×112.0

第二章　地

地とは人間の暮らしが営まれる場所です。地球、大地、土地、地方、地域社会と、どこまでも広がっています。地球上で人跡未踏の地はもはや深海だけのようです。人間は地を耕し、水を引き、定住し、集落を作り、都市を建設して来ました。ここに紹介する風景は、必ずしも名所として多くのひとびとを集めて来た場所ではありません。むしろ、画家たちがそれぞれに見つけたお気に入りの風景です。とりわけ都市風景には、そこで営まれる人間の暮らしや生き様に強い関心が向けられているように思います。

23	藤田嗣治	1886-1968(明治19-昭和43)	モンルージュ、パリ	1918(大正7)	キャンヴァス、油彩	41.0×33.5
24	佐伯祐三	1898-1928(明治31-昭和3)	ラ・クロッシュ	1927(昭和2)	キャンヴァス、油彩	52.5×64.0
25	ジャン=バティスト・カミーユ・コロー	1796-1875	メリ街道、ラ・フェルテ=スュ=ジュアール付近	1862	板、油彩	40.5×54.0
26	カミーユ・ピサロ	1830-1903	ライ麦畑、グラット=コックの丘、ポントワーズ	1877	キャンヴァス、油彩	60.3×73.7
27	ジョアン・ミロ	1893-1983	シウラナの教会	1917	キャンヴァス、油彩	46.3×55.1
28	長谷川潔	1891-1980(明治24-昭和55)	南仏風景	1920-30年代(大正末-昭和)	キャンヴァス、油彩	54.0×65.0
29	柏木俊一	1894-1971(明治27-昭和46)	道	大正時代(1912-1925)	キャンヴァス、油彩	37.5×45.5
30	北川民次	1894-1989(明治27-平成元)	山村初春(高草山風景)	1941(昭和16)	キャンヴァス、油彩	60.5×72.5
31	金山平三	1883-1964(明治16-昭和39)	千曲川(信濃路の春)	1956-64(昭和31-39)	キャンヴァス、油彩	41.0×53.0
32	鳥海青児	1902-1972(明治35-昭和47)	張家口	1939(昭和14)	キャンヴァス、油彩	41.0×53.0
33	曽宮一念	1893-1994(明治26-平成6)	スペインの野	1968(昭和43)	キャンヴァス、油彩	73.0×91.0
34	野口謙蔵	1901-1944(明治34-昭和19)	虹の風景	1941(昭和16)	キャンヴァス、油彩	50.3×60.7

地と人をつなぐ物語

人事というと、すぐに会社や役所の人事課を思い浮かべる人が多いと思いますが、本来は、文字どおり人間にまつわる事、人間の仕業を意味します。そのほとんどは、他人にとっては取るに足らない私的な出来事として終わるわけですが、特別な出来事が語り継がれます。むしろ語り継がれることで伝説となり、物語となり、歴史書に記録されて歴史的事件となるのです。文字とともに、絵はそれを伝える重要な手段でした。絵解きという言葉がありますが、まさしく物語を絵で解くのです。ここでは、曽我物語と蒙古襲来を描いた絵に光を当て、それらの絵が何を語って来たのかに耳を傾けることにしましょう。

35			曽我物語　富士巻狩・仇討図屏風	17世紀中頃(江戸前期)	紙本金地着色	各156.8×356.6
36	菊池容斎	1788-1878(天明8-明治11)	蒙古襲来之図	1862(文久2)	絹本淡彩	161.2×83.2

第三章　人

風景画を絵画のひとつのジャンルとすれば、その中に描かれた人間は点景人物と片付けられがちです。しかし、風景とは人間が見た世界です。どれほど人間社会から隔絶された高山や大海原が描かれたとしても、それをそのように見ている人間を、私たちは絵を通して見ているのです。あるいはまた、肖像画であっても(自画像でさえも)、当の人物がそこにいるのではありません。この画家には世界がこう見えているのかと、驚き、感心することは誰にもあるはずです。石田徹也の「風景」に国境を越えて多くのひとびとが共感を寄せるのは、単に現代の日本社会ではなく、人間が生きる風景を描き出したものだからでしょう。

37	鳥海青児	1902-1972(明治35-昭和47)	はにわ	1959(昭和34)	キャンヴァス、油彩	45.7×38.0
38	ポール・ゴーギャン	1848-1903	家畜番の少女	1889	キャンヴァス、油彩	73.3×92.1
39	オーギュスト・ロダン	1840-1917	パオロとフランチェスカ	1887-89頃	ブロンズ	29.8×59.1×27.0
40	オーギュスト・ロダン	1840-1917	女のケンタウロスのトルソと絶望する若者		ブロンズ	31.2×24.5×13.1
41	石田徹也	1973-2005(昭和48-平成17)	飛べなくなった人	1996(平成8)	板、アクリル	103.0×145.6
42	石田徹也	1973-2005(昭和48-平成17)	燃料補給のような食事	1996(平成8)	板、アクリル	145.6×206.0
43	石田徹也	1973-2005(昭和48-平成17)	無題6	2001頃(平成13頃)	キャンヴァス、アクリル	130.0×162.0
44	伊藤隆史	1933-1997(昭和8-平成9)	現代人A	1959(昭和34)	合板、油彩	140.0×91.0
45	伊藤隆史	1933-1997(昭和8-平成9)	現代人	1959(昭和34)	合板、油彩	152.0×91.0
46	鶴田吾郎	1890-1969(明治23-昭和44)	余の見たる曽宮君	1922(大正11)	キャンヴァス、油彩	114.5×91.0
47	曽宮一念	1893-1994(明治26-平成6)	自画像	1914(大正3)	キャンヴァス、油彩	45.8×33.6
48	加藤泉	1969(昭和44)-	無題	2005(平成17)	キャンヴァス、油彩	91.0×60.3
49	郭徳俊	1937-	クリントンと郭	2003(平成15)	紙、シルクスクリーン	54.5×41.3
50	郭徳俊	1937-	ブッシュ2001と郭	2002(平成14)	紙、シルクスクリーン	54.0×36.3
51	郭徳俊	1937-	オバマと郭	2009(平成21)	紙、シルクスクリーン	51.6×36.8
52	小谷元彦	1972-(昭和47-)	胸いっぱいの愛を(Single girl)	2005(平成17)	デジタルプリント、ウッドフレーム	172.7×122.5
53	森村泰昌	1951-(昭和26-)	批評とその愛人(1)～(7)	1989(平成元)	カラー写真、額縁	各90.0×106.0
＊54	森村泰昌	1951-(昭和26-)	批評とその愛人　マケット	1989(平成元)	紙、木、ラス網、粘土、石膏、アクリルガッシュ	30.0×49.5×29.0
55	ジュリアン・オピー	1958-	歩いているティナ	2009	映像作品/52インチ液晶ディスプレイ、PC	125.7×74.8×12.5
56	宮島達男	1957(昭和32)-	LIFE (complex system) - no.1	2017(平成29)	LED、IC、イケガミプログラムのマイコン、電気ワイヤ、赤外線センサー、アクリル板、アルミニウムハニカムパネル、ステンレススチールフレーム	200.2×320.4×13.3
57	河原温	1933-2014(昭和8-平成26)	JAN.24, 1982. "Sunday." "TODAY" Series No.6, 1982.	1982	キャンヴァス、アクリル	20.3×25.4
58	河原温	1933-2014(昭和8-平成26)	JAN.21, 1988. "Thursday." "TODAY" Series No.1, 1988.	1988	キャンヴァス、アクリル	20.3×25.4
59	河原温	1933-2014(昭和8-平成26)	APR.2, 1988. "Saturday." "TODAY" Series No.12, 1988.	1988	キャンヴァス、アクリル	20.3×25.4
60	森万里子	1967(昭和42)-	Higher Being I	2013(平成25)	Fujiflexプリント、ルーサイト、アルミニウム	122.0×122.0×7.6
61	清川泰次	1919-2000(大正8-平成12)	天と地と－５６	1956(昭和31)	キャンヴァス、油彩	213.0×286.0
62	中村宏	1932(昭和7)-	早来逢機・1	1988(昭和63)	キャンヴァス、アクリル、マジックペン	112.0×162.0
63	前田守一	1932-2007(昭和7-平成19)	作品CB-1「暗墨」	1959(昭和34)	紙、木版	177.0×172.0
64	柳澤紀子	1940(昭和15)-	水邊の庭Ⅰ	1998(平成10)	エッチング、メゾチント、アクアチント、ルーレット、手彩色、ベランアルシュ紙に雁皮刷り	60.0×105.0
65	柳澤紀子	1940(昭和15)-	水邊の庭Ⅸ	2003(平成15)	エッチング、メゾチント、アクアチント、手彩色、ベランアルシュ紙に雁皮刷り	102.5×50.0
66	秋野不矩	1908-2001(明治41-平成13)	たむろするクーリー	1984(昭和59)	紙本金地着色	94.5×294.0